

て、「政治的要素がタイの経済発展にたいし最も重要な役割を演ずることが記憶されるべきである。賢明な政策立案があるかぎり、タイ経済の前途は明るいであろう」と指摘していることに、わたくしは強く同意する。第2章では1881年から大東亜戦争勃発までの金融・銀行の発展を述べる。第3章は日本の実質的な占領下における銀行制度であり、軍事占領と金融との関係は興味深い。第4章は戦後の金融と銀行制度の発展であって、とくにインフレをできるだけくいとめ、通貨の安定をもたらしたタイ国政府の努力は高く評価されよう。つづいて現状分析となり、第5章はタイ国立銀行と現在の諸商業銀行の説明、第6章は商業銀行の支店組織についての説明、さらに第7章は商業銀行法の解説、最後に第8章は近代的な商業銀行のありかたを述べる。末尾にタイ国商業銀行についての統計と、タイ経済にかんする文献がおさめられている。

専門外のわたくしが本書を紹介したひとつのゆえんは、ともすれば現地出版のものは、わが国に紹介されていない傾向があることを考えたためである。しかし、これだけの、まとまったタイの金融・銀行についての研究が、タイ人の手により、しかもこれだけきれいにタイで印刷出版されていることで、ぜひ紹介したいという強い気持があるためでもある。

だが、1964年6月30日という最も新しい貸借対照表を見るに、タイの商業銀行（タイで設立16行、外国本店のもの13行、計29行）の、資産総合計が15,811百万バーツ（765百万ドル）にすぎず、また最大の資産をもつバンコク銀行のそれが3,502百万バーツ（170百万ドル）にすぎないのである。いかにこの国においてさえ、商業銀行の発達がおくれているかが明らかである。（木岡 武）

Michael Brecher: *The New States of Asia, A Political Analysis*. Oxford Univ. Press, 1963.

とくにアジアの新興国家の場合には、その政治の理解は国内政治と国際政治を総合したアプローチを取ることが必要である。それらの国家は、それ自身の力は弱く、それを取り囲む環境の圧力はたかいからである。ネールの秀れた伝記の著者 Michael Brecher のこの著書は、そのアプローチを試みたものとして、アジアの新興国の政治を理解する良い手引であると言う

ことができる。

彼は第1章において、植民地主義からこれらの国家が独立する過程を歴史的に描写したあとで、第2章では現在の政治の不安定を研究する。貧困、積年の政府への不信、政治的エリート間の分裂に加えて、これらの国が独立の時に採用した立憲民主体制は、いささか非現実的であった。国民には民主主義の経験はなく、社会は数年前の戦争と革命の動乱の後で混乱しており、しかも政治秩序を保つために必要な人力、とくに訓練された官僚が不足している。さらに、ビルマやセイロンなど多くの国家はかなり強力な少数民族を統合することに成功していないために、国内はさらに安定を欠いてしまう。そして何よりも、政治的決定に時間がかかる民主主義は、急速な工業化を望むこれらの国の指導者の気持と合致しないものである。こうした理由から1958年ごろから、西欧民主主義への批判が公然となされ、軍部が抬頭し始めたのであった。しかし、その政治は依然として安定をみていない。

しかも、これらの国家は新らしく得た地位を守ることにのみ熱心で、必要とされる国家間の協力はきわめて僅かである。著者は第3章において、東南アジアの国際関係を世界政治における「従属的システム」(Subordinate state system) と考え、その特徴を、(1) その国力の弱さ、(2) 地域を統合する機関の不足、(3) その構成メンバー間の統合の欠如をあげ(それはコミュニケーションと輸送の不足と関係する)、その結果としてシステムが「支配的システム」によって浸透されていると言う。第6章もまた同じような問題をやや詳しく、そしていささか描写的に扱っているが、そこでも著者は東南アジアが他の領域からの圧力に押される「低気圧地帯」だというコラ・デュ・ボアの意見に賛成し、東南アジアは第1次世界大戦前のバルカンに似ていると言う。その貧困さを考えると、「東南アジアは未来の世界のアキレス腱である」という著者の言葉は、傾聴に値する警告であると言えよう。（高坂正幾）

Hanks, Jr. L. M.: *Merit and Power in the Thai Social Order*, American Anthropologist, vol. 64 (1962), No. 6, 1247-1261.

センター関係の方々が接触されることの多いタイ国人についてのべた論文にめぐり合ったので紹介しよ

う。この論文は、タイ国には基本的に社会秩序を支えているものとして功德 (merit) と力 (power) の要因があると説く。社会秩序の維持にはむしろ経済的・政治的要因が大きな支えになっているし、ことにわれわれの社会では多くの場合それ以外の要因をさほど重要視しないとさえいえる。したがってここで説かれていることは、われわれには奇異に思われるほどである。だがこういう社会もあるのだ。まず功德については次のようである。

目指すことを成功させること、苦痛をまぬかれること、この点の能力に差があることによって世界にはおのずから序列ができあがっている。まず大きくは神々と天使が人間の上に位し、人間の下に他の動物が位置するという序列があるが、人間の間にも同様の理由によって序列が生ずる。この能力の発生は功德に依存する。功德は利心なきことと表裏をなし、他に恵むことによって功德は積まれる。功德を持つことが決定的に重要なことであるから、当然恵むことが大いに所望される。恵もうとする構えはタイ国人には恒常的なものになっている。人はこの功德の増減によって序列の中を上下する。そして恵む人とそれを受ける人によってこそ集団が誕生し、集団内はつねにこの関係が軸になっている、と。このようにのべる功德は、身分的上下の人間関係を排する道徳的理念であると解される。

これに対して、力は誰にでもある道徳的には中性的な個人の能力のことで、持ち前の能力や経験、知識のもたらす能力である。宇宙的原理ともいえる功德のはたらきに比べたらこれのはたらきはよわい。たとえば力によって娘を短期口説くことはできても、永続的結婚を成り立たせるのは功德である。そういう差はあるが、タイ国人にはつねにこの「力」を肯定する構えもあって、非道徳的に利を追って左に右に浮動する傾向がつよい。われわれから見れば忠誠とか誇りの意識があまりないとさえいえる。

こうした社会ではおのずから血縁者が相寄り、そこでは相互敬愛の心が失われてはいない。上記した力の承認がここでも見られ、ときに離反することはあるが、しかしやはり上の心がたしかに離反のスピードをにぶらせている、と。

この論文は人々の意識面のうごきに最大の注意を払い、したがってなかなか微妙な捉え方を試みていて、社会秩序ないし社会統制の把握を目指す課題に関連し

て興味ふかいものを示している。

かつてベネディクトが日本人について禁欲的倫理的側面と享乐的放縱の側面とを指摘した。所詮個人においてもつねに消え難い矛盾相剋の二つの側面ではある。両名ともいわばそれをついたといえるが、現実に社会の中で個人的にも集団的にもどのようにこの相剋が調整され生活の秩序が保たれているのか、より大きな関心はむしろそこにある。もっとも本論文は最初から目標をそこにおいていたのではなかった。

(築島謙三)

Hla Myint : *The Universities of Southeast Asia and Economic Development, in Pacific Affairs Vol. xxxv, No. 2, Summer 1962, pp. 116~127.*

教育の経済的価値あるいは投資的意義が今日ほど高く掲げられた時代は未だかつてなかったと言ってよい。この論文も、大学教育を経済発展と関連づけて考察しようとしている点において、一連の教育投資論と軌を一にするものである。ただ、東南アジアの教育問題が主として初等段階に集中している現在、高等教育の具体的問題を取り上げたところに意義がある。

植民地時代における東南アジアの大学は、送り出す卒業生が余りにも少なく、また職業教育や技術教育を犠牲にして高等普通教育 (liberal education) の比重を重くしすぎる傾向があったが、戦後そのあり方が批判され、大学の理念そのものが問題とされるに至った。しかし、大学がそのような基本的な問題を考え、それぞれの国の特殊な要求に適した新しい型の大学の概念を体系的に作り出す前に、これらの大学は押しかけてくる学生数のためにふくれ上がってしまった。このため大学はすしずめ状態となり、これが大学の水準を低下させ、経済発展をも阻害する結果になっていると言う。

したがって、大学教育が効果的に経済発展に寄与し得るためには、確かに、著者の指摘するように、東南アジアのほとんどの大学においてみられるこの詰め込みによる「交通難」(traffic jam) を緩和する実際的な方法を見出し、いろいろな面での需要と供給のバランスを確保する必要があるであろうし、また、教育支出のどれだけが実際に経済発展を促進するのか、そしてそれらの教育支出は他の経済発展計画にどのように